

『星と祭』を読んで

新田由紀子

『星と祭』は一九七二年刊行の井上靖の長編で新聞小説として連載された。舞台は琵琶湖で湖北の秘仏巡りとヒマラヤトレッキングの話も出てくるので、興味を引かれて斜め読みをしていた。

今回読書会で取り上げられたので、分厚い上製本にも関わらず持ち歩いて読了し、じわりと湧き起こる感動にしばらく瞑目してしまった。身近にいそうな人々の生死を題材にして、平明で簡潔な文章で書かれている。描写が微細で話が繰り返されるが、小間切れ読書にはかえって都合がいい。頁を開けばすぐに本の世界に引き込まれた。

会社社長架山は娘を琵琶湖のボート転覆事故で失う。娘は前妻との子で家庭の複雑さが筋の展開に厚みを添える。ボートには見知らぬ青年が同乗して共に湖底に沈む。漁船も加わり捜索が行われるが、竹生島水域の遺体は上がりにくいという。琵琶湖の神秘性や民俗色が興味深いところだ。

娘の死を受け入れられない架山は娘と心の対話を交わし、自分は別な星にいてこの身はその影なのだと思いつながら喪を過ごす。一方で青年の父親大三浦はひたすら息子の死を嘆き、湖岸の村里に秘められた十一面観音像を巡っては祈り続ける。このくぐりたりは読者を鄙びた趣の湖北の旅に誘ってやまない。また、遺族である二人の父親が立場や信条に固執して死者を共に葬れないこだわりには、人間の生の矮小性を感じる。

七年もの悲しみの歳月を過ごす架山を「月」が吊いへ導く。死んだ子供が月夜に遊ぶ合唱曲、大三浦が誘う琵琶湖の月見、そしてヒマラヤの観月行へ。そこで彼が見るのは、月光に聳える悠久の峰々だ。宇宙に連なる大自然の「永劫」を目の当たりにして、人は生きて死にそこに何の意味もないのではないか。

架山は大三浦と和解して月光の琵琶湖に葬儀の船を出す。大三浦の読経に瞼を閉じると、幾体もの十一面観音が光臨して二人の死を祀る。

人間の生死が大自然のたまゆらの現象だとしても、人は死にとらわれて生きる魂なのだろう。